

P2-028

日本と中国の祖母の孫育てと心理社会的な変化・人間関係の満足度との関連

久保 恭子¹、穴戸 路佳²、田崎 知恵子³、
坂口 由紀子⁴、刀根 洋子⁵、倉持 清美⁶、
井上 直子⁷、劉 海紅⁸

¹東京医療保健大学 東が丘・立川看護学部 看護学科、
²西部文理大学、
³日本保健医療大学、
⁴日本医療科学大学、
⁵目白大学、
⁶東京学芸大学、
⁷東京家政大学、
⁸西藏民族大学 教育学院

【目的】

日本と中国の祖母による孫育て・心理社会的な変化・人間関係の満足度との関連を明らかにする。研究方法：日本人の中高年女性500名、中国人410名に質問紙調査を実施した。分析方法は孫育てと祖母の心理社会的変化、人間関係の満足度との関連をSpearmanの相関係数で確認した。

【倫理的配慮】

本研究は所属機関の倫理委員会の承諾を得た。

【結果および考察】

1 対象者の概要日本人祖母172名(34.2%)、平均年齢66.4±8.53歳、中国人祖母372名(90.7%)、平均年齢58.8±7.69歳であった。2 祖母の孫育てと祖母の心理社会的な変化との関連日本人祖母は、孫育てをしている人ほど、祖母になって幸せであり($r=.214$ 、 $*p=.048$)、かつ、孫の世話は大変($r=.444$ 、 $*p=.000$)と感じていた。中国人祖母は、祖母になって幸せだと感じており($r=.336$ 、 $p=.000$)、負担感との関連はなかった。以前、日本では『育児をしない男を、父とはよばない』というものがあつたが、孫育てをしない祖母は祖母としての変化は少なく、「孫育てをしない女性をおばあちゃんとはよばない」という現状があることがわかる。今回、新たに明らかになった点は、祖母の心理社会的な変化は祖母と孫(孫家族への支援を含む)との相互作用から生じるものであり、母子のきずなが母子の相互作用によって形成されるように、祖母-孫との相互作用により発達していくことがわかる。3 祖母の孫育てと人間関係の満足度との関連日本人祖母は孫育てをしている人ほど、夫の関係($r=.254$ $p=.010$)、中国人祖母は友人との関係に満足していた($r=.210$ 、 $p=.014$)。日本人の祖父母らの時代は、夫は仕事、母親が育児を担うという役割分担が一般的であった時代であり、孫育ての世代となり、夫も定年してようやく一緒に孫の世話をすることで、子(孫)育てが夫婦での話題となってきたのであろう。中国人祖母が孫を育てる時、自宅室内では活動的に孫を遊ばせることができないため、公園や遊園地あるいは同じ年齢の孫を抱える祖母(友人)の家へ行き、孫同士を遊ばせている。祖母達は孫を遊ばせながら、互いに孫育ての経験や娘、息子夫婦と自分たち夫婦との関係、自分の生活スタイルの変化等について共通の話題をもち、語りあっている。祖母達は周りの皆が、ともに似たような生活をしていることで安心感をもち、『ばあば友(友人)』との関係を深めていると考える。

P2-029

病気の子どもの学び支援システム開発に関する研究

—韓国のサイバー学校の取り組みを中心に—

滝川 国芳¹、西牧 謙吾²

¹東洋大学 文学部 教育学科、
²国立障害者リハビリテーションセンター病院

【目的】

文部科学省平成26年度学校基本調査によると、平成25年度間に病気を理由に年度間通算30日以上欠席した児童生徒が、小学校で18,763人、中学校で18,580人存在する。この中には、退院後に自宅療養を余儀なくされている、あるいは病弱・身体虚弱教育を行う学校に転校しないままに入院療養している子ども達が数多く含まれていると推測される。今後、病弱教育におけるシステムとして、病気によって学校を長期欠席している児童生徒の実態に合わせたICT活用による教育が必要と考える。そこで、本研究では、ICT活用による病気の子どもの公教育をすでに実施している韓国のサイバー学校の取り組みを分析し、日本のICTを活用した学びシステム開発への活用を検討した。

【方法】

2015年3月に、ICTを活用して、入院や自宅療養している病気の子どもの対象に公教育を行っているソウル市教育情報院教授学習支援センター蜜の味虹学校にて、現地調査を実施した。韓国のサイバー学校の学校制度上の位置づけ、Web会議システムを用いた遠隔授業の指導方法、指導内容等を検証した。

【結果】

韓国では、2005年「特殊教育振興法」改正により法的に位置づけられた健康障害教育において、学籍を異動することなく、入院中も自宅療養中も、ICTを活用した公立のサイバー学校の授業を受けることができる。ソウル市教育情報院教授学習支援センターのサイバー学校は、教育士・研究員・事務員の3人が学校運営を担当している。実際に、遠隔授業を担当する講師は35人、遠隔授業をするためのブースが17室設置されていた。出席日数の不足によって進学ができない(原級留置)システムである韓国において、病気による欠席のために進級することができない事態を避けることができる。通信のためのサポート体制、授業教材の作成は、ソウル市教育庁が組織的に対応している。遠隔授業内容は、小・中学校に報告書として提出され、病気の子どもの出席と認められる。

【考察】

韓国では、病気の子どもの学籍を異動することなく、病室においてWeb会議システムによって、公教育を受けることができている。日本においては、病気を理由に「学校」に行くことができないことによって、学ぶ機会が失われている。韓国のICT活用による教育システムは、日本の病気の子どもの学び支援システム開発に大いに示唆を得るものである。